

国際社会学部

大石高典

Takanori OISHI

地域社会研究コース／アフリカ地域

生態人類学・文化人類学・アフリカ地域研究



生態人類学とは

地域に生きる人間の個体や集団と環境との相互作用を明らかにすべく、地域社会に入り込んでフィールドワークをおこないます。ここで言う「環境」には、動植物や物理化学的環境のほかに、政治経済や国家制度などの要素も入りますが、衣食住や生業など、具体的な生活に関わる事柄から始めて地域社会の生態・社会・文化の相互連関を読み解いていく学問です。ミクロなデータを積み重ねて、人類社会の環境適応や進化までを視野に入れますが、観念や理論をいじるよりも、まず現場から思考することを大事にする現場主義が特徴です。したがって、自分の眼で見る／自分の耳で聞く／自分の足で歩くことが基本になります。

研究紹介

食べることとフィールドワークが大好き。中部アフリカのカメルーン共和国、コンゴ共和国で熱帯林に暮らす農耕民や狩猟採集民の生業（なりわい）や生活文化について研究してきました。

最近では、地球環境問題と地域社会の関わりについても調べています。また、日本でも食や環境についての研究を進めています。国際社会レベル、地域・国家レベルの問題認識とローカルレベルの問題認識のギャップに対して人類学や地域研究の立場からどう貢献できるかを模索しています。

■アフリカでやっていること：

- カメルーン東部州における村落社会の長期継続定点調査にもとづく、狩猟採集社会と農耕社会の民族間相互作用の研究。
- 熱帯林の生物多様性は社会文化や経済活動とどのように関わっているのかを、人と動物（魚類を含む）の具体的な関係から探っています。

■日本でやっていること：

- 現代日本の森林と地域社会の関係について、狩猟と獣肉利用、焼畑農業、養蜂などの自然利用に着目して実践研究をおこなっています。
- 世界のメガシティの近傍で最も遊漁が盛んな東京湾をフィールドに、遊漁活動の自然認識や持続可能性について予備調査を始めています。

■地域をクロスしてやっていること：

- 民族誌資料をもちいた子ども向けワークショップの開発と実践研究。様々な地域を専門とする地域研究者、俳優、ファシリテーターで、それぞれの地域の面白さや生活を伝える方法を試行錯誤しています。

担当授業

- 地域社会とSDGs
- アフリカ地域研究入門
- アフリカから「地域研究」を展望する
- アフリカ研究のための英語
- 民族誌で学ぶアフリカの生活世界
- フィールド人類学・地域研究

関連する分野

- 民族生物学
- 熱帯生態学
- 狩猟採集民研究
- 地球環境学

出版物

- 『民族境界の歴史生態学——カメルーンに生きる農耕民と狩猟採集民』
- 『犬からみた人類史』
- 『アフリカで学ぶ文化人類学』
- 『焼畑が地域を豊かにする』
- 『アフリカの森の女たち』
- 『狩猟採集民からみた地球環境史』
- 『人と動物の人類学』
- 『アフリカ漁民文化論』
- 『マンガ版マルチスピーシーズ人類学』
- 『アフリカ学事典』
ほか多数。

国際社会学部

フィールドの人類学ゼミ



▲東京湾のタチウオ

どのようなゼミか

具体的なモノやコトから人間について考えることを目指します。毎日、食事をし、会話をし、仕事をし、踊り、寝る。そんな地域に生きる「具体的な人間」に関心のある人を歓迎します。生態人類学は、自然や環境との関わりから人間について探求する学問です。したがって、食や身体、環境など生活に密接に関わる事柄が入り口となります。これらの事柄を切り口にすることで、地域社会について地に足のついたアプローチが可能になるでしょう。

■身体を使って思考しよう！（歩きながら／食べながら／測りながら／コミュニケーションしながら考える）

文献を読むだけではなく、参加者の関心や希望に応じて、国内のフィールドに出かけ、聞き取りや参与観察、データ収集の実践についてワークショップ形式の実習や合宿形式で学びます。このゼミでは、アフリカや日本をはじめ、各自が関心を持つ地域について学ぶことを通じて、私たちが当たり前だと思い込んでいる生活や文化について捉え直すことも目標の一つです。学問の醍醐味は対話です。他者や文献やモノ（環境）とのやりとりの中で、自分の関心や問いを客観化し、深める楽しさを味わってほしいと思っています。

■テーマは自由。何をするかは自分で考える。

地域や言語、テーマを限定しませんが、論理的な思考を求めます。これはという題材を見つけたら積極的に提案を。皆の智恵を借りながら、どうやって研究の俎上に載せられるかを考えましょう。自分の五感を通じて直接に経験できる事実や感覚を大事にして欲しいので、文献研究や統計資料の分析だけではなく、なんらかのフィールドワークや実験を研究に取り入れることを推奨します。具体的方法を検討してもがく中で、問いが自分の手の届く範囲に見えてくるはずです。

■「言いたいこと」を伝えるための表現を工夫しよう。

卒論・卒研指導にあたっては、論文や作品を完成させることだけではなく、最終発表会での発表を重視しています。プレゼンテーションと執筆は、研究に必要な思考を進めるための両輪だからです。なにがしかの試行錯誤をして得た発見を、どのように他者に伝えるかを考えてもらいます。プレゼンのあり方を考えることは、研究成果の形態の検討にもフィードバックされることになるでしょう。



▲丸木舟に乗って、熱帯林の中の村へと向かう。

卒業論文・卒業制作

- 拡大する「家族」——ケアでつながる現代ガーナ人社会
- 「統合」政策を生きる——パンデミック前後・北ノルウェーのソマリ系住民と私の民族誌
- 消費の内側から狩猟をみる〜ジビエ料理屋でのスタッフ経験をもとにして
- 渋谷道頓織劇場で形成される「まなざし」のありかた
- 風呂とせんべい——石川県加賀市東谷地区今立における人の移動の一考
- 漁村の密集集落と「ミセ」の活用——徳島県海陽町鞆浦を事例に
- 仕立屋として生きる—ダッカ管区ウトラ地域のドルジーの働き方
- 「一人多重マイク自宅録音」での音楽制作

おススメの本

- 伊谷純一郎『ゴリラとピグミーの森』
- 石牟礼道子『苦海浄土』
- コリン・ターンプル『森の民』
- 宇井純『公害原論』
- 中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』
- 鶴見良行『ナマコの眼』
- アナ・チン『マツタケ』
- 小川さやか『チョンキンマンションのボスは知っている』
- 奥野克巳『人類学者K』